『纂元面授』と『灌頂秘口決』

――日本密教史における癡兀大慧の位置――

龍谷大学非常勤講師
亀山隆彦

一　序　論

日本仏教・密教学界ではあまり注目されないが、醍醐寺三宝院流に伝わる聖教の中でも、古くから偽撰が主張される『石室』あるいは『纂元面授』に関して、小川豊生氏は、次のような興味深い指摘を行っている。

同書［＊『建久記』＝『石室』は建久七年（一一九六）六月十五日夜に臨終直前の勝賢から成賢が伝授されたものとして、空海撰「自性法身大灌頂伝法秘密生起本源」（空海作の五位図）と、元杲作「義注秘決一巻」と題した五位図との二種の図を掲げたあと、さらに実運の口決「面授一巻」を載せている。三宝院流の五位図にかかわる秘義を集約したもので、末尾には成賢から道教・憲深へ、憲深から実深へ、さらには後宇多院や後醍醐天皇へと伝えられた旨の記載がある【中略】なお、同書中の実運「面授一巻」の記述は、『纂元面授』や本書Ⅱ―第一章第3節およびⅣ―第一章第6節で紹介した真福寺蔵『灌頂秘口決』とも同一であり、これらを一括した研究が求められる。(1)

小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』からの引用である。現在、高野山大学図書館に所蔵される『建久記』（真福寺蔵本だと『石室』）の詳細に関して、傍線部の通り解説する。[2] 小川氏によると、本書は、それぞれ「自性法身大灌頂伝法秘密生起本源」「義注秘決一巻」と題した二種の「胎内五位」の図[3]、および「面授一巻」という文献から成り、全体としては「重書の趣」を持つ。[4] そして、その中の「面授一巻」は、『纂元面授』や『灌頂秘口決』といった文献の内容と同一であるという。

第一に、『纂元面授』は、鎌倉初期の醍醐寺僧、成賢（一一六二～一二三一）による勝賢（一一三八～一一九六）の口伝の記録と伝えられる。しかし、伊藤聡氏も指摘するように、古来偽撰が疑われ、実際、その可能性が非常に高い。[5]『灌頂秘口決』は、同じく鎌倉末期の臨済宗聖一派の僧、癡兀大慧（一二二九～一三一二）の晩年の口決を記録した文献で、こちらは真作と見て間違いない。[6] 今日、『続真言宗全書』二三と『中世禅籍叢刊』四に、それぞれの活字本が収録されるが、「面授一巻」（『石室』＝『建久記』）を除くこれら二書の関連について、小川氏はさらに次のように述べる。

たとえば、前述した成賢が勝賢の口授を筆録したものとして伝わる『纂元面授』一巻には次のようにある［46］。

問ヲ、本有ノ成道モ則チ如ニ修生一五相五輪ノ成等正覚ナリ耶如何。答ヲ、本有ノ修生不レ可レカラ有ニルル差別一。五相五輪ノ成覚ハ全ク以テ同ジ也。文ニ云ク、二水和合シテ成ニズ一円塔一ヲ、転声三業相通スト。当レシ知ルル**此ノ虚円月輪ハ三十七尊八葉九尊トナリ、惣体能生万法之本源也。**

【前略】じつはこれと同文が本書Ⅱ―第一章で取り上げた、癡兀大慧（仏通禅師）の自筆の巻子を嘉暦二年（一

三二七）に能信が伊勢において書写した安養寺流の口決集『灌頂秘口決』にも引かれており、そこでは右の文につづいて胎内五位図が掲げられ（本書Ⅳ―第一章第6節参照）、さらに次のように記されている【後略】[7]

引用文中で言及する『纂元面授』の原文について、同じものが、『灌頂秘口決』にも「引かれ」るとあるがどういうことか。[8] 菊地大樹氏によると、『灌頂秘口決』は、長短あわせて計六七の問答から成る。[9] 詳しくは後述するが、その中の第五の問答が、先の『纂元面授』の文と一致するということである。

このような指摘の上で、小川氏は、『纂元面授』と『灌頂秘口決』、さらに『建久記』（＝『石室』）の「面授一巻」を「一括した研究」の必要性を強く訴える。[10] 本稿では、そういった小川氏の問題提起を踏まえて、特に『纂元面授』と『灌頂秘口決』の関係に注目し、その結びつきの実態・意義を検討する。以前、類似の問題点について、特に「本有」の語の理解に注目して議論を試みたことがあるが、[11] 本稿では、そこからさらに進んで、次の点を明らかにする。

①語句や言い回しの細かな違いを除き、『灌頂秘口決』巻上と中の内容、具体的には、全六七問答中の四～三九問答が、『纂元面授』の内容とおおよそ合致する。

②二書の成立時期、類似点と相違点、癡兀大慧の他の著作との関係を考慮すると、『灌頂秘口決』が『纂元面授』を参照したと考えるのは難しく、後者が前者に基づいた可能性が高い。

②に挙げた理由について、ここでもう少し補足しておくと、次の通りである。第一に、伊藤氏も指摘するように、『纂元面授』の成立は、早くとも一三一八年である。対して『灌頂秘口決』は、癡兀大慧が死去する一三一二年以前の執筆と考えられる。次に、その内容を比べると、『灌頂秘口決』だけにあって『纂元面授』にはない記述は多数だ

が、その逆は、ほぼ見当たらない。加えて『纂元面授』の場合、細かな部分で語句の不統一も目立つ。第三に、同じく内容について、たとえば「本有」に関する理解等、『灌頂秘口決』の主張は、『十牛訣』や『東寺印信等口決』等、癡兀大慧の他の著述にもしばしば見出される。

以上の点から、『纂元面授』は、癡兀大慧と臨済宗聖一派、または同僧に端を発する法流である「安養寺流」とも何らかの関係を持つと推定される。[12] これも後述するが、以上の結果は、『纂元面授』の著者に関するイメージに大きく影響するものであろう。栂尾祥雲氏、守山聖真氏は、主に内容面から『纂元面授』の記者を成賢と判断するが、第一にそれは首肯できない。また、『纂元面授』の偽撰を主張する伊藤氏は、醍醐寺三宝院流の中の報恩流に属する真言僧を著者と考えるが、[13] その点に関しても改めて考察が必要と考える。

最後に本稿の構成を述べておくと、全五章からなる。続く第二章で『纂元面授』の来歴と概要、第三章で『灌頂秘口決』の来歴と概要を確認する。その結果を受けて、第四章で、『灌頂秘口決』と『纂元面授』の比較を行う。残った第五章は、結論である。

二　『纂元面授』の来歴と概要

1　『纂元面授』の来歴

第一に、『纂元面授』の来歴を確認しておくと、本書の末尾に次のような識語が見える。

本記云云、

成賢、以不屑之身ヲ次付法之正統ヲ、酌当流之淵源ヲ。黷院家之貫首ヲ、在リ恐レ在リ憚、恐棘恐

棘。抑此ノ秘口者、総シテハ東寺一門事相教相之大綱、別シテハ院家相承之修行ノ要意肝心也。代代最後之口授ハ未レタ記ニセ翰墨一ニ。雖レモ然リト、予愚昧之間、於ニテ師主僧正御前一ニ記レスル之ヲ。仰セニ曰ク、祖師三宝院僧正ハ究ニメ三師之三重一ヲ、為ニル一門東寺之長者一ト。至ニリテハ多流他門一ニ敢テ以テ無ニキ偏執一歟。可ニクシテ授与一ス無レケレハ機者、入ニレ箱底一ニ可シ納ニメ埋ニム地中一ニ。教誡等、再三之間感涙数変落シ畢ヌ。

沙門成賢記スル之ヲ(14)

鎌倉初期の醍醐寺僧である成賢が付したと伝えられる伝授の識語だが、その記述内容に従うなら、成賢が自らの「師主僧正」、つまり勝賢より相承した「秘口」を記録したものが、本書『纂元面授』である。(15)

同じく成賢の識語によると、この『纂元面授』は、総じていえば東寺一門に伝わる「事相教相之大綱」のことで、別していえば醍醐寺三宝院で相承する「修行ノ要意肝心」である。こういった「代代最後之口授」は、通常記録に残ることはないが、成賢は「愚昧之間」に、師である勝賢の前でこれを記した。したがって、それを授与するに相応しい「機」の者がいなければ、「靴箱」に入れて、地中に埋めるよう厳しく誡める。

続いて、成賢以降の『纂元面授』の相承に関しては、同じく末尾に次のような文を掲載する。

御記ニ云ク（後字多院大覚寺殿）

此ノ決者、遍智院僧正受ニケテ師主覚洞院僧正（勝賢ノ）口授一ヲ所ニ注記一スル也。仍テ成賢僧正秘蔵之余リ、都テ以テ不レシテ能レハ授ケル而入ニレ納ニメ赤ノ漆ノ箱一ニ、深ク納ニメ置ニキ護摩堂一ニ畢ヌ。経ニタル年月一ヲ之後、実深僧正貫首之時不慮ニ見出シ畢ヌ。偏以テ、大師三宝鎮守権現之加護冥助也。自ニリ実深僧正一以来至ニル憲淳僧正一ニ。僧正為ニル師主一ト之間、乍レラ入ニレ赤ノ漆ノ箱一ニ令ニム伝ニ授セ予一ニ。云ク彼ノ僧正以ニテハ写本一ヲ止ニムヘキ胸一ニ之由、申ス之ヲ云ヲ云。一門之諸流並ヒニ他門之学

徒、不レ知二ラ名字一ヲモ。何二況ヤ於二一見一ヲ哉。仍テ令三メ伝二授セ性円二品親王一ニ畢ヌ。

文保二年三月二十一日(16)

こちらは、後宇多院（一二六七～一三二四）による伝授識語と伝えられる文である。それによると、成賢は、先ずこの『纂元面授』を秘蔵し、後継者である報恩院憲深（一一九二～一二六三）も含めて、誰にもそれを授けることはせず、赤い漆の箱に入れて、醍醐寺の護摩堂の奥に納め置いた。

その後、憲深から報恩院を継承した実深（一二〇六～一二七七）が、醍醐寺の「貫首」（座主）であった時に再度発見され、その後、憲淳（一二五八～一三〇八）に至り、後宇多院にまで伝授される。さらに、文保二年（一三一八）三月二一日には、性円親王（一二九二～一三四七）に伝えられた。(17)

さて、このような『纂元面授』の基本的な性格に関して、守山聖真氏はさらに次のように述べる。

> 此の纂元面授の真実性如何であるが、この書は首尾一貫して他の偽書に見るような矛盾と破端とがない。論理並然、文体また当時の風を伝え、且つ完備しておるように見え、更に古くから諸書に引用されておるので遍智院［＊成賢］の口と見て差し支えないものであろう。(18)

守山氏は、主に『纂元面授』の内容面に注目し、そこに「他の偽書」のような記述の矛盾、あるいは論理的な破綻が確認されないことから、本書を成賢によるものと主張する。この守山氏の見解に関して、思想・教学研究の視点から頷ける部分もないわけではない。しかし、客観的な証拠は十分とはいえず、守山氏の主観的な理解という印象も否めない。

その一方で、伊藤氏は、①後宇多院による伝授の識語が、既に偽書と判ぜられる『須秘口決事』のそれに近似すること、[19]②内容もその別伝と判断できること、③醍醐寺報恩院流の伝書といいながら、同流の初祖である憲深は見ていないこと等を踏まえて、[20]『纂元面授』は、「やはり偽書と見なすのが妥当」と結論付ける。[21]加えて、その成立時期も、文保二年（一三一八）以降と推定する。[22]この先の『灌頂秘口決』の問題を考えなければ、筆者の基本的な見解も、伊藤氏のそれと同じである。

2 『纂元面授』の概要

続いて『纂元面授』の概要である。最初に叙述の形式を紹介すると、「師主面授ニ云ク」の語から始まる序文、および前述の識語を除く本文は、基本的にすべて問答形式で記される。[23]もう少し具体的に解説すると、本文は、計二九の問答から成る。また、その内容だが、冒頭に掲載される次の文とも関連して、灌頂儀礼の解釈が大きな比重を占めると指摘できる。

夫レ伝法灌頂ト者、南天開塔之元初、東寺一門之大旨ナリ。是密宗之本源当流之肝髄豈不レ然ラ乎。[24]

付言すると、数ある灌頂の中でも、特に醍醐寺三宝院流で重視された三重相伝による灌頂の解釈を明らかにする。三重相伝による灌頂とは、三つのステップ（三重）を用いて、大日如来の計三種の印契と五種の真言を弟子に伝授する灌頂のことである。[25]『纂元面授』では、その一々のステップは、第一に胎金両部の大日如来が「自証」を離れ、「化他ノ大行」に赴くプロセスを象徴し、さらに、性行為の結果として男女の赤白二滴が結合し、そこから胎生の過程が始まることを意味するとも説く。

つまり、三重相伝の灌頂に仲介される形で、法身大日如来の「成道ノ始終」と、衆生の存在の基盤である「輪廻受生ノ初後」が直接結び付けられる。加えて『纂元面授』では、このような三重相伝の灌頂の背景となる各種思想・教学、例えば「本有」の概念や「行位」に関しても、複雑な議論を展開する。

さて、このような本文の記述の中に、赤白二滴あるいは「二根交会」といった語が見えることから、前述の守山氏は、同じく『纂元面授』について次のように評価する。

> 由二瑜伽法中一者、理智父母（舎利蓮華）ノ二根交会シ、和合相応スルナリ、【中略】
>
> と云うのは立川邪流の根本思想である。立川流なるものが邪教の本源とすれば、此の纂元面授の説は立川流的であることは勿論、その根本理念を端的に説いたものであり、又立川流の根本教典とも云える。此の思想が三宝院流の嫡流の覚洞院勝賢、遍智院成賢、蓮蔵院実深、報恩院憲深と相承して来たのでは、浄不浄を論議する範囲を既に超越して居る。(26)

引用文中の「立川流」について、もとは一二世紀の初頭以降、関東に実在した真言密教の一流派を指すが(27)、他方で、性欲に関連する教えを説き勧めたとして非難される想像上のグループ、真言密教の「異端」流派も意味する(28)。無論、守山氏は後者の意で、立川流という呼称を用いている。しかし、こういった守山氏の評価に反して、右に述べたような灌頂解釈は、癡兀大慧『灌頂秘口決』にも登場するのである(29)。

三　癡兀大慧と『灌頂秘口決』

1　癡兀大慧について

引き続き、癡兀大慧（以下、大慧）と『灌頂秘口決』の詳細を確認していく。大慧は、東福寺の開山である円爾（一二〇二～一二八〇）の高弟の一人で、自身もその第九世住持をつとめた鎌倉末期の臨済宗聖一派の僧である。呼称として「仏通禅師」がしばしば用いられるが、諡号である。同じく禅宗思想史における大慧の位置づけを鑑みるに、栄西（一一四一～一二一五）、道元（一二〇〇～一二五三）以後の「宋朝禅」の定着期に活躍した禅僧とみなしうる。

既に様々な先行研究で概観する通り、一三世紀後半から一四世紀前半にかけて、無学祖元（一二二六～一二八六）、一山一寧（一二四七～一三一七）等、中国の高名な禅僧が立て続けに来日する一方で、無関普門（一二一二～一二九一）、南浦紹明（一二三五～一三〇八）といった日本人僧も積極的に中国に渡り、同地の禅を学んだ。このような交流を経て、鎌倉後期には「禅宗」に関する日本国内の情報は爆発的に増大し、この時期、同宗はようやく日本定着を果たしたといえる。その中の大慧の位置付けについては、伊吹敦氏が次のように総括している。

> この時代の代表的な禅僧たちは、たとえ日本人であっても、ほとんど全て中国で禅を学んだ人々であった。それは叢林で出世するためには不可欠の要素の一つであったのである。しかし、日本における修学のみで著名となった禅僧がいなかったわけではない。代表的な人物としては、東福円爾の法嗣で伊勢に安養寺などを開いた癡兀大慧、後嵯峨天皇の皇子で無学祖元の法嗣となった高峰顕日（仏国国師、1241-1316）、東山湛照の法嗣で、一山

一寧らにも師事した虎関師錬（1229-1312）などがある。[30]

加えて、末木文美士氏は、大慧の思想の特質に関して「円爾を受け継ぎながら、新たに密教を摂取し、安養寺流を築いたのは大通禅師癡兀大慧であった」と指摘する。[31] つまり臨済宗の僧でありながら、密教にも深く通じた人物であったということである。

大慧と密教の関わりの詳細については、代表的な伝記である『仏通禅師行状』に次のような記述がみえる。円爾に入門する以前、大慧は、「台衡徒」として「八宗」の学を広く学び、その中でも「密学」に精通し「発明」するところも多かった。当時の「東台両家/密者」は、そのような大慧の知識を「平等義」と呼んで称讃した。[32] すなわち、天台の学僧ながら真言の教えにも等しく通じ、その知識は真言僧からも高く評価されたということである。

また、東福寺の第九世住持をつとめる傍ら、伊勢の地に大福と安養の二寺を開き、後代「安養寺流」と呼ばれることになる独自の法流を形成し、密教と禅の兼学を奨励した。[33] 今日、寶生院大須観音真福寺に伝わる『東寺印信等口決』『灌頂秘口決』『菩提心論随文正決』といった文献は、この安養寺流が伝えてきた秘説をめぐる大慧の著述である。[34]

2 『灌頂秘口決』の概要

次に『灌頂秘口決』の書誌情報を紹介すると、大須観音真福寺寶生院に、以下の四種の写本が伝わる。[35]

①寂雲所持本を能信・祐禅で分担し書写したもの（嘉暦四年（一三二九）三月）

②寂雲所持本の書写を、さらに能信が写したもの（元徳二年（一三三〇）正月）

③寂雲所持本の書写を、さらに祐禅が写したもの（嘉暦四年（一三二九）四月）
④新写本

この中③に掲載された識語によれば、『灌頂秘口決』は「先師仏通禅師大和尚最後御口決」、つまり大慧の臨終最後の口決である。したがって、本書の詳しい撰述時期は定かではないが、一三一二年以前の成立であることは疑いえない。加えて、奥書に「三宝院灌頂秘口決」の語が見えるが、菊地大樹氏によると、『灌頂秘口決』に記される秘説は真言小野流、その中でも金剛王院流相伝の三宝院流（覚智方）に由来するという。

さて、本書の内容に関しても、菊地大樹氏が次の通り簡潔にまとめている。

本書は、長短合わせて六七番の問答より構成されている。そして先述のように、それぞれの問答はある体系的な構想に従って進められるのではなく、問いに対する答えがさらに次の問答を想起させるという繰り返しのもとに進められ【後略】

本書の外題は「灌頂秘口決」であり、冒頭には灌頂の次第やその意味付けについて、図を用いながら展開している。しかし、議論は次第に灌頂儀礼そのものの事相教相からは離れて、より本質的な密教の教主論（仏身論）あるいは顕・密・禅の教判論などに移ってゆく。つまり本書は、単なる灌頂儀礼に関する秘事口伝なのではなく、そこから始めて、灌頂の背景にある教理や、儀礼に象徴される密教説の肝要を語ったものと理解することができよう。[36]

先に述べた通り、『灌頂秘口決』の本文は計六七の問答から構成される。それら問答の中、同じく先に紹介した三

重相伝による灌頂儀礼を中心に、真言密教の事相と教相の両方にまたがる多種多様な話題に関して、議論が試みられる。

四　『纂元面授』と『灌頂秘口決』の関係

最初に、序論で紹介した『纂元面授』の第二問答を例に、『灌頂秘口決』との記述の一致がどのようなものか確認しておく。

i）『纂元面授』第二問答

問ヲ、本有ノ成道モ則チ如ニ修生一ノ五相五輪ノ成等正覚ナル耶、如何。答ヲ、本有ノ修生不レ可レ有ニ差別一。五相五輪ノ成覚ハ全ク以テ同ジ也。文ニ云ク、二水和合シテ成ニスル一円塔一ヲ、一字転声三業相通スト文。当レニ知ル此ノ虚円月輪ハ三十七尊ト八葉九尊トナリ、物体能生ノ万法之本源也。

右記の文と『灌頂秘口決』の第五問答の記述が一致する。次の通りである。

ii）『灌頂秘口決』第五問答

問ヲ、本有ノ成道モ、則チ如ニク修生一ノ五相五輪ノ成等正覚ナリ耶、如何。答ヲ、本有・修生雖モ是別異ト、五相五輪成等正覚ハ、似同不異也。依レ之、左図レスル之ヲ。文ニ云ク、二水和合シテ成ニズ一円塔一ヲ、一字転声三業相通スト。当レニ知ル、此ノ虚円月輪ハ三十七尊ト八葉九尊トノ物体ナリ、能生万法之本源也(37)。

傍線を引いた箇所が、両書の相違点である。『纂元面授』第二問答と『灌頂秘口決』第五問答を比較すると、相違点は細かな語句表現に限られ、極めて軽微である。相違によって問答の意味が変わることもない。[38]

おおよそこのような形で、『纂元面授』全一七頁（『続真全』一二三・三～一九頁）中、①序文（三頁上）、②結語（一八頁下）、③識語（一九頁上～下）を除いた残りの記述が、『灌頂秘口決』巻上・中の内容（『中世禅籍叢刊』四・五一九頁～五四四頁）と一致する。したがって、守山氏が、「立川邪流の根本思想」あるいは「立川流的」と評した「纂元面授の説」も、次の通り『灌頂秘口決』内に見出される。

iii）『纂元面授』第二問答

理趣釈ニ云ク、由ニテ瑜伽ノ法ノ中ニ一念ノ浄心相応一スルニ、便チ証二ス真如実際一ヲ文。由瑜伽法ト者、中東理智ノ父母ノ二根交会シ和合相応スルナリ。一念浄心相応ト者、理智ノ不二大智ノ父大悲ノ母一、互ニ無キカ余念一故ニ云ヒ一念ト、無二無三ノ故ニ云ヒ浄心一ト、二心混和スルカ故ニ云フ相応一ト。中有ノ識子託ニ入シ二滴一ニ、成スルカ解脱実相ノ仏身一ヲ故ニ云フ便証真如実際一ト也。秘教ノ深意、密宗ノ実義、伝授伝法ノ正意、但在リ此ノ分一ニ也。[39]

iv）『灌頂秘口決』第五問答

理趣釈ニ云ク、由ニテ瑜伽ノ法ノ中ニ、一念ノ浄心相応一スルニ、便チ証二ス真如実際一ヲ文。由瑜伽法ト者、中東理智ノ父母ノ二根交会シ和合相応スルナリ。一念浄心相応ト者、理智ノ欲楽、至極終窮スレハ、愛情徹レシ骨ニ、互ニ無シ余念一。故ニ云フ一念一ト。無二無三、故ニ云フ浄心一ト。二心ノ欲楽更ニ無シ相違一。故ニ云フ相応一ト。中有ノ識子托ニ入シ二滴一ニ、成スル解脱実相ノ仏身一ヲ。故ニ云フ便証真如実際一ト也。秘教ノ深意、密宗ノ実義、伝授伝法ノ正意ハ、但在リ此ノ分一ニ也。[40]

iii）とiv）についても、傍線で示した通り語句や表現に細かな相違は見られるが、基本的な文の構造はそのままである。すなわち『般若理趣釈』の「由二テ瑜伽ノ法ノ中ニ、一念ノ浄心相応一スルニ便チ証二ス真如実際一ヲ」を随文釈して[41]、第一に五方の「中」と「東」、両部の「理」と「智」、さらに「父」と「母」それぞれの「根」（生殖器）の間の相応を示し、続いて、父母それぞれの「白」「赤」の二精滴（または「欲楽」）が、「交会」を通じて混じり合うことを確認する。最後に、中有の「識」が、未来の父母の交会を見て愛欲を起こし、混和した二滴に入ることを説く。

v）『纂元面授』第五問答

今行者到二リ阿闍梨ノ所一ニ請レルニ法ヲ、瑜伽ノ知識為レニ息ムニ心外ニ求レムルル法ヲ之心一、依二テ無覚門ノ本有一ニ行二シ入壇灌頂之道儀一ヲ、授二ク一切衆生色心実相従本際来常是毘盧舎那平等智身ヲ至使成法界之旨一ヲ。故ニ正ク指二シテ輪廻受生ノ初後一ヲ、直ニ示二ス法仏成道始終一ト之時、行者除下遍二詣シ十方一ニ求二メ成仏一ヲ不レ知二ラ自身即成仏一之愚癡上ヲ。[42]

vi）『灌頂秘口決』第八問答

求法ノ学者到二リ知識ノ所一ニ請フニ法ヲ、瑜伽ノ知識為レニ息ムニ外求法之心一ヲ、依二テ無覚門ノ本有一ニ、行二シ入壇灌頂之道一ヲ、授二ルカ一切衆生色心実相、従本際来、常是毘盧舎那平等智身、非是得菩提時、強空諸法使成法界之旨一ヲ故ニ、正ク指二シテ輪廻受生ノ初後一ヲ、直ニ示二ス法仏成道始終一ト之時、求法ノ学者除二ク遍詣十方求成仏、不知自身即成仏之愚癡一ヲ。[43]

加えて、『東寺印信等口決』『十牛訣』といった大慧の他の著作にも頻出する「無覚」と「有覚」二種の本有概念に関しても[44]、v）とvi）のように、『纂元面授』と『灌頂秘口決』でほぼ共通の主張が確認される。i）ii）iii）iv）

のような比較的平易な記述だけでなく、v）vi）のような重要概念の解釈まで合致するということは、『纂元面授』と『灌頂秘口決』の記述の一致は偶然ではなく、また共通する参照項の問題でもないだろう。ごく一般的に考えて、一方が他方の底本であった可能性が極めて高い。

加えて、『灌頂秘口決』は、時間の面で明らかに『纂元面授』に先行する。だとすると、『灌頂秘口決』が『纂元面授』の底本であったとも推測できる。

もちろん、『灌頂秘口決』『纂元面授』とは別に、第三の底本が存在した可能性は、今の段階では完全に否定できない。また、『灌頂秘口決』が『纂元面授』の底本だとして、どのような人物がその書写と流布に関わったか、現時点では具体的なイメージも描きづらい。そこで本稿では、大規模な記述の一致が見られること、その指摘を最終的な結論として、底本と著者の問題に関しては、今後の課題としておきたい。

五　結　論

改めて指摘するまでもないが、第四章で言及した事例以外にも、検討すべき記述の一致は数多く残る。ただ、このまま順に紹介と考察を続けても、不必要に煩雑な内容となってしまうため、ここで一先ず筆を擱くことにする。以下に、各章の検討結果をまとめておく。

①識語によれば、『纂元面授』は、成賢が勝賢より相承した「秘口」の記録である。だが伊藤氏が指摘する通り、成賢の直弟子の憲深が同書の伝授に関わっておらず、偽書と断定される文献と記述が類似することを考えても、識語の主張は首肯できない。

②『纂元面授』は、序文と識語、および本文にあたる計二九の問答から構成される。問答の内容については、灌頂儀礼の解釈が大きな比重を占める。

③大慧は、鎌倉末期の臨済宗の僧だが、密教に関しても優れた知識を有していた。同僧の口伝を問答形式で書き残したものが『灌頂秘口決』で、著述の時期は定かではないが、識語中の「最後御口決」という表現から一三一二年以前の成立と考えられる。

④『灌頂秘口決』の主要テーマの一つは、三重相伝による灌頂であり、議論も概ねそこから始まる。ただ菊地氏によると、その灌頂の背景となる教理・思想、儀礼そのものが象徴する密教説の肝要も合わせて述べる文献でもある。

⑤これら『灌頂秘口決』と『纂元面授』を比較すると、細かな語句や表現に相違は存在するが、序文・識語を除くほぼすべての記述内容が合致する。この結果は、『纂元面授』の著者像にも小さからぬ影響を及ぼす。

最後に今後の課題を述べておくと、先ずは、小川氏が、『纂元面授』『灌頂秘口決』と共に一括して研究すべきとした『建久記』（＝『石室』）の問題が挙がる。はたして『建久記』と『纂元面授』『灌頂秘口決』の一致はいかなるものか。三書合わせてみた場合、『灌頂秘口決』の立ち位置はどう理解されるか。議論を進める必要がある。

また、その問題と合わせて、記述の一致が生じた理由、どのような人物がそれを主導したか。『纂元面授』『灌頂秘口決』『建久記』以外にも記述が一致する文献は存在するか。こういった問題に関しても、綿密に考察しなければならない。

註

（1）小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』（森話社、二〇一四年）三三〇～三三一頁・脚注五。［＊］内は筆者注。

（2）小川氏によると、『建久記』と『石室』の内容は全く同じだが、高野山大学図書館本は『建久記』、真福寺所蔵本のタイトルが「石室」であるという。『建久記』『石室』それぞれの詳細は、小川『中世日本の神話・文字・身体』三三〇～三三一頁・脚注五、および、伊藤聡「三宝院流の偽書―特に『石室』を巡って」（錦仁、小川豊生、伊藤聡編『「偽書」の生成：中世的思考と表現』森話社、二〇〇三年）参照。

（3）「胎内五位」は、「赤白二滴」と共に古典的な仏教の胎生学で用いられる概念である。同胎生学では、懐胎のメカニズムと胎児の生育過程を次のように解説する。第一に、懐胎のメカニズムは、性的な交わりを通じて男女それぞれの「赤白二滴」が一つになり、「羯羅藍」（*kalala*）と呼ばれる受精卵が子宮内に形成される。続いて発生した胎児の成長は、「羯羅藍」＝受精卵が「頗部曇」（*arbuda*）、「閉尸」（*peśi*）、「健南」（*ghana*）、「鉢羅奢佉」（*praśākhā*）の四階梯（胎内五位）を経て、四肢を具えた胎児へ生育し、出産にいたる（胎外位）というものである。仏教胎生学と「胎内五位」「赤白二滴」の詳細は、See James H. Sanford, “Wind, Waters, Stupas, Mandalas : Fetal Buddhahood in Shingon,” *Japanese Journal of Religious Studies* vol.24, no.1-2（1997）, and Frances Garrett, *Religion, Medicine and the Human Embryo in Tibet*（London : Routledge, 2008）.

（4）小川『中世日本の神話・文字・身体』三三〇～三三一頁・脚注五参照。

（5）伊藤「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

（6）癡兀大慧『灌頂秘口決』の詳細は、菊地大樹「『灌頂秘口決』解題」（中世禅籍叢刊編集委員会編『中世禅籍叢刊』四、臨川書店、二〇一六年）参照。

（7）小川『中世日本の神話・文字・身体』二七四～二七五頁。

（8）『纂元面授』原文の詳細は、『続真言宗全書』（以下、『続真全』）二三・四頁下参照。

（9）菊地「『灌頂秘口決』解題」六五一頁参照。

（10）小川『中世日本の神話・文字・身体』三三〇～三三一頁・脚注五参照。

（11）See Takahiko Kameyama “Chikotsu Daie’s View on the ‘Inherent Existence’（*honnu*）: An Analysis of Its Relationship with the *Sangen menju*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* vol.66, no.3（2018）.

(12) 栂尾祥雲『秘密仏教史』（『現代仏教名著全集』九、隆文館、一九六四年）、および守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』（国書刊行会、一九九〇年）参照。

(13) 伊藤「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

(14) 『続真全』二三・一八頁下。

(15) 勝賢と成賢の生涯については、それぞれ柴田賢龍『日本密教人物事典』上（国書刊行会、二〇一〇年）三六四頁上～三八一頁下、同『日本密教人物事典』中（国書刊行会、二〇一四年）一頁上～二〇頁下参照。

(16) 『続真全』二三・一九頁上。

(17) 伊藤「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

(18) 守山『立川邪教とその社会的背景の研究』八八頁。

(19) 伊藤氏の主張は次の通りである。「同書［＊『纂元面授』］が偽書であることは、古来からいわれていることである。近年では、守山聖真のように成賢真撰説を唱える論者もいるが［27］、「三昼夜の間」云々は、『須秘口決事』の六月十一日から十三日と対応させていると思われ、その別伝というべき内容より見ても、やはり偽書と見なすのが妥当である。」詳細は、伊藤聡「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

(20) 伊藤氏の主張は次の通りである。「後宇多院の伝授識語によれば、報恩院流の伝書とはいいながら、その初祖たる憲深自身は披見しておらず、次代の実深になった見つかったとされている。このことは、その成立が憲深以後のものなることを示唆するものであろう。」詳細は伊藤「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

(21) 伊藤「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

(22) 伊藤氏の主張は次の通りである。「さらに、後宇多院の伝授識語の信憑性についても、吟味が必要である。文保二年［＊一三一八］三月二十一日のこの日、後宇多院は大覚寺に御幸あり、弘法大師御影供を修しているから［28］、『纂元面授』の性円への伝授はその当日に行われたことになる。これを事実とみなしてよいかについては、現在のところ同識語の真偽を肯定或いは否定する材料はない。従って本稿では、同書の成立は文保二年［＊一三一八］以降であることを確認するに止める。」詳細は伊藤聡「三宝院流の偽書」二二一頁参照。

(23) 序文については、『続真全』二三・一頁上～下参照。

(24) 『続真全』二三・三頁上。

(25) 拙稿「『三宝院灌頂釈』解題」（『中世禅籍叢刊』一二、臨川書店、二〇一八年）七二一～七二三頁参照。
(26) 守山『立川邪教とその社会的背景の研究』八四～八五頁参照。
(27) 櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』（山喜房仏書林、一九六四年）三四七頁参照。
(28) 立川流の系譜、教説、社会的な意味等について、水原堯栄氏以降、守山氏、櫛田氏、近年では、ステファン・ケック氏、彌永信美氏等がまとまった研究成果を提出している。詳しくは水原堯栄『邪教立川流の研究』（全正舎、一九二三年）、守山『立川邪教とその社会的背景の研究』、櫛田『真言密教成立過程の研究』、彌永信美「立川流と心定『受法用心集』をめぐって」（『日本仏教綜合研究』二、二〇〇三年）参照。See also Stefan Köck, “The Dissemination of the Tachikawa-ryû and the Problem of Orthodox and Heretic Teachings in Shingon Buddhism,” *Indo tetsugaku bukkyōgaku kenkyū* vol.7 (2000), Nobumi Iyanaga, “Secrecy, Sex and Apocrypha : Remarks on Some Paradoxical Phenomena,” in *The Culture of Secrecy in Japanese Religion*, ed. Bernhard Scheid and Mark Teeuwen (2006 ; rep., London : Routledge, 2011).
(29) また、『纂元面授』に対する栂尾氏の評は次の通りである。「この書は僅かに七行十四字詰五十四枚のものに過ぎないが、きわめて要領を得た重書である。ただこの書の中に「理智冥合、赤白混和」とか「二根交会和合相応」とかいう如き文字ある故をもって、直ちに立川流の邪書であるとか、成賢に名を借る偽書であるとかいってけなすものが古来尠なくないけれども、これは全くこの書の内容を真面目に検討せざるが故である。」詳しくは、栂尾『秘密仏教史』一七六頁下参照。
(30) 伊吹敦『禅の歴史』（法藏館、二〇〇一年）一九九頁。
(31) 末木文美士「『聖一派』総説」（『中世禅籍叢刊』四）六一二頁。
(32) 詳しくは『仏通禅師行状』（『中世禅籍叢刊』四）五七五頁参照。また、癡兀の生涯については、末木「『聖一派』総説」六一二～六二九頁、高柳さつき「日本中世禅の見直し―聖一派を中心に」（『思想』九六〇、二〇〇四年）、山口興順「臨済宗東福寺派と天台宗（一）―『大日経見聞』の筆録者痴兀大慧について―」（『山家学会紀要』一、一九九八年）等参照。
(33) 「安養寺流」の詳細については、末木文美士・阿部泰郎「『聖一派　続』総説」（『中世禅籍叢刊』一一、臨川書店、二〇一七年）、菊地大樹「『安養寺流印信』解題」（同）、名古屋市博物館・真福寺大須文庫調査研究会編『大須観音　いま開かれる、奇蹟の文庫』（大須観音宝生院、二〇一二年）参照。
(34) 『東寺印信等口決』と『菩提心論随文正決』の活字本は、それぞれ『中世禅籍叢刊』四と一一に収録される。
(35) 本書①が、『中世禅籍叢刊』四に収録される『灌頂秘口決』の底本である。

(36) 菊地「『灌頂秘口決』解題」六五一～六五二頁。
(37) 『中世禅籍叢刊』四・五一九頁下。
(38) ただ、『灌頂秘口決』の場合、右記の第五問答の直後に「胎内五位」の図が提示され、その詳しい解説を述べる。『纂元面授』第二問答の後には、そのような記述はなく、その点では二書は相違するとも指摘できる。詳しくは『中世禅籍叢刊』四・五二〇頁下～五二一頁上参照。
(39) 『続真全』二三・四頁下。
(40) 『中世禅籍叢刊』四・五二二頁下。
(41) 『大正』一九・六〇八頁中。
(42) 『続真全』二三、八頁下。
(43) 『中世禅籍叢刊』四・五二八頁上。
(44) 大慧における無覚と有覚の本有については、末木「『聖一派』総説」、拙稿「『東寺印信等口決』解題」（『中世禅籍叢刊』四）、加藤みち子「痴兀大慧の『廓庵十牛図』解釈」（『東方』三二、二〇一六年）参照。